『曼殊沙華』
横原　凪
4,994 文字

　お盆。塔子は六年前に事故死した弟の悠を思い出す。
　当時、悠の彼女は妊娠していたらしいが、六年経った今も彼女が誰なのかわからないままだ。
　祖母の部屋に入ろうとしたら、悠の幻覚を見た。
　母から頭にツノが生えていると言われた。
　読経を聞きながら塔子は、弟の子を産んだ女のことを考える。

頭皮が蒸されているみたいにむず痒い。今すぐ両手を髪に突っ込んで思いっきり掻きむしりたい。
「塔子」
後ろで母の呼ぶ声がして顔を上げたら、仏壇の写真の悠と目が合った。
「さっきお坊さんから電話あって。この辺りで道に迷ってるらしいのよ。外に出て探してくるからあんた、おばあちゃんのデイの準備しといてくれない？」
「え、休みじゃなかった？今日」
「午後からあけてくれるらしい。助かるわ」
「でも私が部屋に入るとおばあちゃん嫌がるでしょ」
「大丈夫、寝てる」

二歳違いの弟の悠は六年前に車に轢かれて死んだ。十七歳だった。
気さくで小動物みたいにフワフワしていた悠は誰からも好かれた。高校に上がりヤンチャな仲間とつるむようになると、あんまり家に帰らなくなった。
当時は母と私、悠の三人暮らし。三人家族はそれなりに仲良くやっていけてた自負がある。
高二の夏、悠は深夜友人達と肝試しに出かけた帰り、一人道路を横断していたところを飲酒運転の車にやられた。
しばらくして事故現場で悠の亡霊を見た人が後を絶たないと友人から聞かされた私は、遺族を馬鹿にしていると腹が立ち、その友人と確かめに行ったことがある。
免許を持ってない私達は深夜一時頃、タクシーで向かった。
「悠じゃない誰かが面白がってやってるのよ」
後部座席で私は、隣に並んだ友人に吐き捨てた。
「どうしてそう思うの」
友人が真面目な顔で聞くもんだから、私は鼻で笑った。
「だって、そもそも何で事故現場なのよ。私や母さんのいる家には一度も来てくれないってのに」
「霊は死んだ場所に集まるってよく聞くけど」
友達のくせに。静かに反論してくる態度に、私はイラついた。
「それ、誰に聞いたの。幽霊本人に聞いたの？」
「じゃあ確かめてみたらいい」
山の中腹にある廃病院。麓にタクシーを待たせ、懐中電灯を照らしながら、くねくねした真っ暗な道路を友人と二人進んで行った。
「確かこの辺りだったかな」
本音を言うと弟が轢かれた場所なんて行きたくもない。だけど大事な弟が死んだっていうだけで悲しいのに、根も葉もない噂をまき散らされて死んだあともお化け呼ばわりなん

て姉として耐えられない。悠の亡霊なんてどこにもいなかったことをこの私が立証してやらなければ。
「キャーッ」
　すぐ後ろを歩いていた友人が、突然悲鳴をあげた。
　友人が指さす方に懐中電灯を差し向けると、五メートルくらい向こうに、人型の白い靄が揺れているのが分かった。目を凝らしていると、それはだんだん人の形になって、こっちに向かって何か言っている。上手く聞き取れず速足になる。
「おーい！姉ちゃん」
「悠！」
　確かに悠の声だった。
　気がつくと白い靄はいつしか悠の姿に変わっていた。高く伸ばした腕を左右に振りながら、笑っている。
「こっちこっち」
「嘘でしょ、あんた生きてたの？」
　悠はニコニコ笑っている。
「塔子！」
　そばにいた友人が私を呼んだ。振り返った私に、
「あれはどう見ても悠くんだよ」
　両手で懐中電灯を握りしめながら、友人は涙ぐんでいる。
「でもあの子は死んだんだよ？あんたも知ってるでしょ」
「もういいじゃないそんなこと。呼ばれてるんだから、行ってあげなよ」
　友人は陶酔したようにゆっくりと頷いた。
　私は悠に向かって走りだした。分かってる。これは悠じゃない。悠の形をした何かだ。
　やっと手の届く距離まで来た時、私はいつの間にか懐中電灯を手から落としていた。
「あんた誰！」
　私は怖くもなんともなかったから、両手を伸ばし悠に似た亡霊の首を掴みにかかった。そうしたら、すんでの所で両足が浮いた。
「……！」
　一瞬何が起こったか分からなくて足元を見ると、道路にあったはずの防護柵がなくなっていて、私は体ごとズサーっと真下に転がり落ちた。落ちる途中、何とか崖石にしがみついて助かった。あと少しで死ぬとこだった。バクバク鳴っている心臓を手で押さえていると、
「あーあ」
　ちっ、という舌打ちと一緒に、耳元で誰かの声が聞こえて消えた。
　暗闇の中で必死に這い上がると、友人の姿はなかった。おそらく助けを呼びに行ってくれたのだろう。仕方なく一人でタクシーに戻ってみると、友人はどこにもいなくて、運転

席からボロボロの私を見つけたタクシー運転手が驚いて飛び出してきた。
「何があったんですか……」
「いや……別に」
「だって服も破れて……」
　私と目が合うと運転手は慌てて視線を外した。
「道路で懐中電灯落として、探してたら派手に転んじゃったんです」
　あっけらかんと言った私に、運転手はハアー、とため息をついた。
「どうせあの病院でしょう」
「はい。でも途中でこんな目に合ったからもういいやって」
「肝試しか。一時期本当多かったんですよ。でも最近ここらへんで学生が事故に合ったでしょう。それからめっきり減ったんです。さすがにあなたみたいに一人で来る人はいなかったけど……」
「……」
「あと十分待って戻らなかったら警察に連絡するところでしたよ」
「私一人……？」
　タクシーの中を覗いても友人はいなかった。運転手はさっきから私のことばかり気にしている。
「……あの子は戻ってないですか？」
「あの子？あの子ってどの子？」
　運転手は気味悪そうに後退りした。
　その運転手が言うには、乗車していたのは初めから私一人だけだった。私はずっとブツブツ何か呟いていたらしい。そんなはずはない、必死に「あの子」の顔を思い出そうとするけれど、だめだった。でも私は確かにあの子から悠の亡霊の噂を聞いた。そして今日この場所に、ついさっきまで一緒だった。それなのに、そもそもあの子と私はどこで知り合ったのか、顔も名前も、性別さえも、六年経った今でも思い出せないでいる。

　悠が死んで何年か経って、私と母は今の家に引っ越した。ちょうどその頃体調を崩していた祖母も、田舎の家を引き払い、私達と一緒に住むことになった。

　坊さんを探しに行くため母が携帯電話片手に家を出た後、私は祖母の部屋の前に立った。
「ぱん、ぱかぱん。ぱんぱかぱーん」
　何かロずさんでいる。祖母のか細い声が漏れていた。
（何だ、起きてるじゃん）
　ボケてるのか、それとも寝言か。
　そうっと戸を引いてみると、引く戸の隙間から、極彩色の花弁が次から次に溢れ出てくる。

一体何事かと、ぎょっとした私は戸を全開にすると、たった八畳ほどの部屋一面に、赤や青、紫や黄色といった、色とりどりの花弁がこれでもかと敷き詰められていて、どうやって設置したのか、天井の真ん中に吊るされたどでかいウェディングベルが盛大に打ち鳴らされ、地震みたいにぐらんぐらん揺れている。そのウェディングベルの真下にひしと手を握り合い互いを見つめる新郎と新婦。その二人を見知らぬ若者が取り囲んで手を叩いて祝っている。狭い部屋にぎゅうぎゅうになりながら、そこにいる全員が歓声をあげている。
白タキシードの新郎は、悠だった。
寒気と同時に怒りを孕んだ私は、
「何やってんの！」
叫んだ瞬間、全員が一斉に私を見た。ベールを被った新婦の顔は、汚れた布。へのへのもへじ。あ、この顔知ってる。小さい頃におばあちゃんの田んぼで見た。田んぼに立たされていたあの案山子。
私は倒れた。

悠の葬式。参列した悠の友達が私を見て驚いていた。想像していた姉と違っていたらしい。
「あいつ、お姉さんのこと怖がってたから……てっきり元ヤンかと思ってた」
「もしかしてお姉さん二人いるんですか……」
泣き腫らした私は黙って首を横に振った。
「よく『姉ちゃんに見られてる』って言ってたよな、後ろ振り返ったりして」
「そういえばあの時も」
「しっ……」
事故に合った、肝試しの帰り。何かに脅えていた悠は何度も後ろを振り返った。友人達はそんな悠を笑っていた。友人を置いて、悠は追われるみたいに走って逃げた。
そしてー。

事故の二か月前。悠は私に言ったのだ。
実は六歳年上の女性と付き合っている。彼女が妊娠した。高校卒業したら結婚して働く。
もちろん私は反対した。六歳って私よりも年上じゃない。それ、未成年淫行っていうの。世間では立派な犯罪なの。その女を訴えよう。今から一緒に警察行こう。
憤る私を見て、悠は可笑しそうに、
「姉ちゃん違うよ。全部俺から。今まで何回も振られたけど頼みこんで、やっと付き合ってもらえたんだ」
あっそう。だから何。その女がしたことは変わらないでしょう。ロリコン女。あんたが行かないなら私が今からそいつに会いに行く。
「……何しに？」

馬鹿じゃないの。子どもなんて嘘に決まってる。未成年に手出す女の子どもなんて誰の子かわかりゃしないわよ。若くて純情なあんたを働き蜂にして、一生面倒みさせようって魂胆なの。
「その人働いてて……お金だって俺に払わせたこと一回もない」
今はね。そうやって見せてるだけ。大丈夫よ、私が何とかする。
悠は青ざめ、
「嘘だよ。全部、冗談」
それからしつこく女の住所を聞き出そうとしたけれど、悠は口を割らなかった。
その日以降、悠は前以上に家に寄りつかなくなったのだ。
あの時の悠の私を見る目。まるで化け物でも見てるみたいだった。
知ってる。
あの時。それなら私にしなさいって、思わず言ってしまいそうになった。言わなかったけど、悠にははっきり伝わっていたと思う。
悠は死ぬまで私のこと、実の姉だと信じていたから。
そのことがあって、私は極度に疲弊するようになった。母が寝た後、夜中にこっそり外に出て、悠を探した。気がついたら布団の中で目が覚めた。涙で頬が濡れていた。夜中に裸足で走っている夢を、毎日のように見ていた。

悠の死後、一緒に暮らし始めた祖母は、なぜか私を毛嫌いするようになった。
「悠が死んだんはお前のせいじゃ。お前の生霊や」
だったらお前も殺してやろうか。口にしそうになる度、唇を噛む。
幸いにも祖母の戯言に耳を傾ける者は誰もいない。母は認知の一種だと楽観視している。

「塔子」
母に呼ばれた。気がついたら引き戸に寄りかかったままぼんやりしていた。
「何してんの」
祖母の部屋の戸はきちんと閉められている。
「私、おばあちゃんに嫌われてるし、やっぱり……」
「馬鹿だね、あんたは」
母が戸を引いたら、そこはいつも通りがらんとした、色のない部屋だった。ベッドで祖母が鼾をかいている。
「坊さん連れて来た。おばあちゃんの準備は私がしとくから、あんた先に相手してて」
「……わかった」
私の肩を、母が掴んだ。
「何。頭痒いの？」
さっきから無意識に頭を掻きむしっていた。

「どれ、見せてごらん」
　母が両手で私の髪を掻き分けた。
　見てもらうと、小さな瘤、骨の塊みたいな隆起があるのだという。
「ツノみたい」
　母の冗談に、たちまち私は癪全とした。
　その言葉が私の何かを発動させた。
　すっきりした気分で仏間に入り坊さんの後ろに座ると、待っていたかのように読経が始まった。

　どこかで私の知らない女が悠の子を産んでいる。
　私はその子を探している。
　女は葬式に来なかった。悠の携帯にもアドレスは残っていなかった。
　あれは嘘だったのか。でも考えると私の血が途端に波打つ。それだけはれっきとした事実で、何よりの証拠の気がする。

　二十五歳になった私は、今、市で一番大きいショッピングモールでスーパーのレジ打ちをしている。電車で二時間かけて通勤している。
　ツノが突き抜け牙が生えても、そいつが案山子になりすましても、私は必ず捕まえる。

　こんな読経なんか。
　目の前のしけた坊主を眺める。
　去年の坊主はやばかった。去年の坊主は私を見るなり目を反らした。
　あいつは読経の間中私をちらちら振り返って、逃げるように帰って行った。
　今年の坊主はただの飾りだ。

　俯いてぼんやりしてると、ふと、悠の葬儀でぼろぼろ泣き崩れていた若い女がいたのを思い出した。悠の高一の時の副担任と聞いた。
　あの女、どんな顔してたっけ。
　思い出そうとすると、沸騰した血が黒く塗り替えられるような、忌々しい衝動に駆られてきた。
　さっき幻覚を見たばかりのせいか、頭の中で案山子の顔が泣いている。
　悠の亡霊を見に行った友人。そういえばあの子の顔も案山子だったような気がしてきた。

　無性にあの時の女の顔が見たくなった。

　小さい頃、夏休みは家族三人、田舎の祖母の家で過ごした。祖母の田んぼの真ん中にぽ

つんと立たされていた、あの案山子。
　へのへのもへじの分際で、いっちょ前に嗚咽を漏らしてむせび泣いてやがる。

　坊主が振り返って不思議そうな顔でこちらを眺めていた。
　私は声を出して笑っていたのだ。